

## 11.女性劇団「かもめ座」の形成と現状

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/5025">http://hdl.handle.net/2297/5025</a>

# 11. 女性劇団「かもめ座」の形成と現状

松 村 恵 里

- I. はじめに
- II. かもめ座成立まで
- III. 組織構成と活動形態
- IV. 定期公演
- V. かもめ座に関わる意識
- VI. まとめ

## I. はじめに

対象とするかもめ座は、曾々木地区の女性のみ（50歳代、60歳代、70歳代）によって形成された、60歳代（現在平均67歳程）を中心とする地域劇団である。「曾々木は海岸が主体だから」という理由で「かもめ座」と名付けられた。現地調査に入った当初は、婦人会のような存在と考えていたが、調査が進むにつれ、婦人会以上に自発的で団結力が強いという傾向が見えてきた。元々、普段から誰かが何かをしていたら手伝いに行くという相互扶助の気風があり、また、座員の中に旅館・民宿などの宿泊施設関係の者も多く、他地域の人と共に行事を行うことが難しい。ゆえに自然と地区住民としての団結が強まり、助け合いの精神が生まれていると考えられる。女性同士は姓ではなく親しみをこめて名前を互いに呼び合い、男女とも年配者に対して誰彼なく「おじいさん」「おばあさん」と呼ぶことを避け、年齢間の上下差を感じさせない雰囲気があるようにも思われた。

しかし、単に地区住民として結束しているだけでは、舞台という複雑で多面的な要素を内包したモノ作りを行うことはできない。かもめ座はどのような背景の中で成立し、如何にして現在まで継続されてきたのか。

本章では2005年7月30日～8月6日の調査に加え、同年9月2日、12月26日、2006年3月4・5日の補充調査を行った際の聞き取りを主にしながら、かもめ座について概観する。IIで戦前から続く村芝居からかもめ座設立までの経緯を、IIIではかもめ座の組織形成と舞台作りまでの製作の様子を述べることとする。IVで3月4・5日の定期公演の総練習と本番の模様を9月の依頼公演などとも

比較しながら記し、V では座員の意識や支える家族の意識、また公演を主催する側の意識などを聞き取りとアンケートを交えながら検討する。最後にVIでまとめと考察を行うこととする。

今回は残念ながら、全座員の年齢を把握することができず、年齢層を明確に表記することができなかった。また、全座員への詳細なインタビューが実現しなかったため、1人でも多くの座員の「言葉（声）」を聞くための補足的なアンケートを行ったことを付け加えておく。

## II. かもめ座成立まで

### 1. 村芝居の系譜

戦前から戦後にかけて、この曾々木では歌舞伎を題材とした村芝居が行われていた。このような村芝居が直接かもめ座成立に影響を及ぼしたわけではない。しかし、両者の間には、曾々木の地で村芝居が行われたことにより、幼少の頃に村芝居の舞台を踏んだ経験を持つ者がかもめ座座員として存在することや、座員の関係者が村芝居の役者であったことなどの関連が見受けられる。また、曾々木に加え町野の他地域、東大野、広江でも芝居が盛んにおこなわれていたことは、戦前に、隣接する輪島地区で、村芝居があまり盛んでなかったことなどに比しても、1つの地域的な特徴としてあげることができる。

曾々木で行われていた村芝居には、3つの大きな流れがあった。1つ目は、戦前に行われていた、歌舞伎に興味のある男性有志の集まりによるもの。2つ目は、戦前から戦後にかけて村芝居に力を注いでいた1人の男性に牽引された、戦後すぐの女性芝居。3つ目は、戦後しばらくして青年団によって行われたものである。

1つ目は、現在の春日神社で、仕事をもちながら芝居を演じるために集まった地元住民によって行われた(図1)。文久元年、南惣右衛門の日記にも「八月十八日、・・・曾々木芝居見物二人々罷越、昼弁当為持遣ス、自分曾々木芝居見物ニ出、松村氏ニ昼飯給及ビ暮帰ル」と、曾々木の芝居見物をしたという記録が残っている(輪島市史編纂専門委員会編 1972:245)。

当時役者達は本物の歌舞伎役者のように白塗りの化粧と衣裳をつけて芝居に臨んでいたが、その日常もあたかも役者の様で、中には役者気取りになって仕事に支障をきたす者もいた。聞き取りの中では、祖父の義兄(姉の夫)が、普段から仕事よりも村芝居に熱心な役者で、その生活のなかでも本を見ながらよく考案を練っており、いつも「お茶をもって来い」「煙草を買って来い」と、まるで役者の様であったと聞いたことがあるという話も聞かれた。歌舞伎役者を先生として呼んで練習した事もあったそうで、いかに力を入れていたかが窺える。

曾々木以外にも町野では、東大野、広江、その他柳田の五十里(いかり)、南志見(なじみ)の東

山などでも芝居は盛んであった。部落が違っても誰でも観劇のために行き来することができ、このような芝居は祭りと同様、結婚相手を見つける出会いの場として機能した。輪島では芝居が盛んでなく、また、交通の便も悪かったため、町野の方まで観劇のために足を伸ばす人は非常に少なかった。

戦前の村芝居の様子を知ることは容易ではないが、現在曾々木に居住されるN氏(90歳代の女性)が、昔の舞台や観劇の様子を鮮明に覚えておられた。N氏の記憶する地域は、おそらく曾々木ではなく東大野のことを主にしていると思われる。しかし、失われつつある戦前の町野地域における村芝居の様子を把握するための貴重な記録として、本節で取り上げることにする。

N氏は母親が大野(東大野)から嫁いできており、里帰りのため大野に行く際に芝居を観る機会に恵まれた。尋常小学校を卒業した位の頃、芝居を観に行くための「いっちょうら」として薄い紫色の元禄袖を作ってもらって、「嬉しくて、嬉しくて、仕方なかった」と語っている。元禄袖<sup>1)</sup>は当時のN氏にとっては憧れであつたらしく、元禄袖を作ってもらう前は欲しいあまりに筒袖を「むしり出して」、袂を少しでも長くしようとして母親に叱られたこともあった。また、広江の芝居を観たこともあるそうで、広江の鳥毛の舞台で、「カナダのおばあちゃんが太鼓を叩いていた」とも記憶されていた。その他、演目としては『高野山の石動丸(東大野?)』『初菊(広江?)』<sup>2)</sup>などが挙げられた。

東大野でも舞台には神社が使用された(図2)。役者は仕事を持つ素人の地元住民で、自分が出演する時は親戚をサンジキ(おそらく棧敷のこと。2メートル近く高かったという)に招待する。招待された人々は良い席に招待された礼として、お饅頭を五重箱に詰めてお返しをした。役者の出入りには花道も使用され、2本の時もあれば3本の時もあった。音楽には、三味線、太鼓、笛、唄が用いられ、浄瑠璃の演奏台は、拝殿の外に設置された。このような浄瑠璃の演奏台の様子は大野も曾々木も同様であった。夜の照明には、薪、松明、大き目の蝋燭、角灯が使用され、また、電気も当時はすでに普及していた。ただし、電気より角灯の方が多く使われていた。

N氏は宝塚が好きで、18、19歳の時、宝塚が好きだった「ソイヤのお父さん」に電車(大阪まで3円?)で宝塚に連れて行ってもらったこともあり、本人のみならず、周囲にも観劇に興味のある人がいたことが窺える。18歳で曾々木に嫁いでから、曾々木の村芝居を初めて観たということだが、何故かその一度のみに留まったということであり、当時有名であった「カジヤマの女形さん」は観たことがないということであった。聞き取りによると、このカジヤマの女形さんは芝居だけでなく、詩吟、書道に長けた無口な方だったという。

次に2つ目の女性芝居についてである。現在、村芝居について記憶しているK氏(70歳代の女性)やM氏(60歳代の女性)によると、戦後1945~50(昭和20~25)年頃は、正村吉雄氏という当時30~40代の方が、リーダーとして牽引していたということであった。

1947～48（昭和22～23）年頃に正村氏によって女性ばかりが集められ、春日神社で『巡礼お鶴』が上演された（図3）。前述のM氏は7～8歳の頃（戦後）、正村氏の指導のもとで『巡礼お鶴』の子役（お鶴役かと思われる）として出演した。練習は正村氏の家で行われ、本番は3～4月頃、少し汗ばむ陽気の夜に春日神社で行われた。音楽として鳴り物には太鼓が使用され、唄（マイクなし）が歌われたということであるが、笛、三味線の使用があったのかは分かっていない。観客は莫座、座布団持参で見物し、また、出演者には花として「金一封」や「御酒」（目録が存在したが、現在は不明）が贈られた。神社以外でも東小学校（曾々木は岩倉小学校下）でも、夜に上演されたということであった。

正村氏は芝居や歌舞伎への造詣が深く、唄・踊り・太鼓に長けていて、各部落の盆踊りの「音頭取り（唄を歌う人）」でもあった。戦前から、唄や太鼓を伴いながら奥さんと2人で各地を慰問し講和を行っていたが、後に津幡の寺（浄土真宗？）の僧侶になり、奥さんと共に北海道へ渡った。K氏は正村氏が北海道へ渡ったことにより、曾々木の村芝居の流れは低迷していったと見られている。

村芝居の3つ目の流れである青年団によるものは、戦後、数回行われた。神社やお寺（昔曾々木にあったが今はない）、また鳥毛の舞台（＝鳥毛の劇場（映画館））で、『番場の忠太郎』などが上演された。この鳥毛の舞台では町野各地区（東大野、金蔵、寺山、曾々木など。ただし全地区ではない）の青年団が出し物（唄、踊り、芝居）で競演したこともあったが、長続きはしなかった。

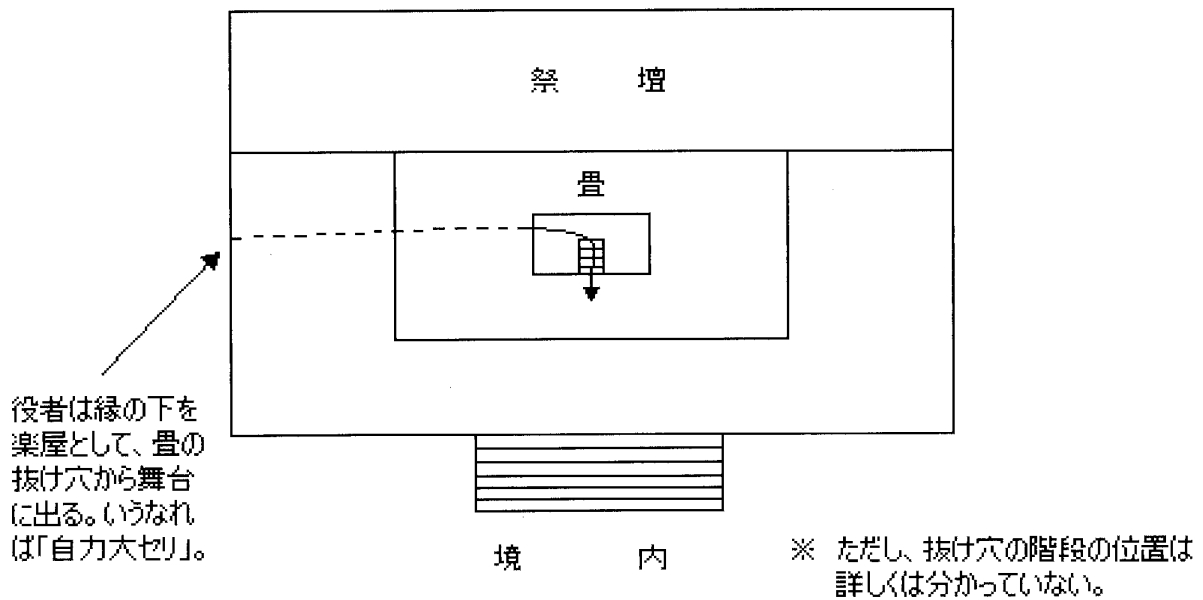
その頃の芝居道具や衣裳は春日神社の拝殿祭壇横の物置に保管され、宮司ではなく地元住民によって管理されていた。保管の仕方があまり良くなく、ネズミに食われるなどしながらも、数年前まで衣裳は春日神社の屋根裏に保管されていたが、天井をスタシ<sup>3)</sup>した際に「汚い衣裳が出てきた」ので全て破棄されてしまった。大道具は一部が現在春日神社の天井裏（梁の上）に保存されている。ただし、東大野には村芝居の衣裳が八幡神社に保存されていて、年に一回虫干しされている。これらは民俗資料館に展示されたこともあり、当時の様子を偲ぶことができる。

東大野には村芝居の衣裳が現在も保管され、曾々木では破棄されていることについては、かもめ座の座員からは「（文化を保存しようという）意識の問題であって、決して曾々木より東大野の方が村芝居が盛んだったわけではなく、曾々木も負けず劣らず盛んだった」という答えが返ってきた。また、曾々木近隣で芝居が盛んであった理由について、M氏が祖父から聞いた話によると、「武士にも公家系統と武家系統があり、公家系統の流れを汲む集落には歌舞伎などの芸能が流行る」ということであり、平家方である時国家を有する地域であることを考えれば一理ある説明であると思われる。

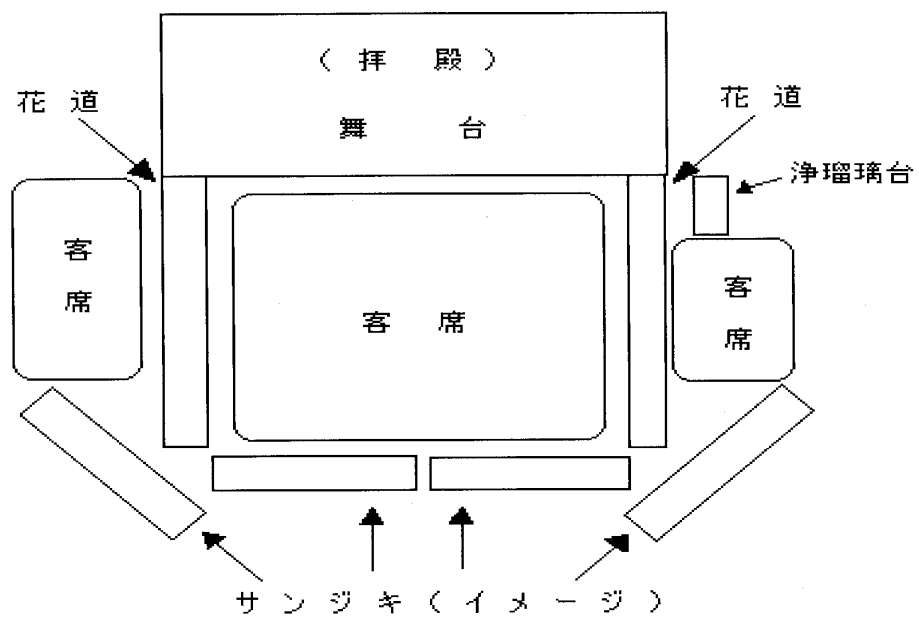
以上のような男性に主に牽引されてきた演劇活動は、「コバシのおじいちゃん」「ニシムラのおじいちゃん」「サガワのおじいちゃん」「カジヤマの女形さん」のように、今でも芝居好きとして、曾々木ではその名が挙げられる素人役者達を生み出してきたが、テレビの普及など娯楽の多様化に伴い

下火となってゆき、青年団によるものを最後に行われなくなった。曾々木における新たな活動の兆しは、上時国家のお雛様を飾ったお雛祭り公演に端を発する女性を中心としたかもめ座発足まで時を待つことになる。

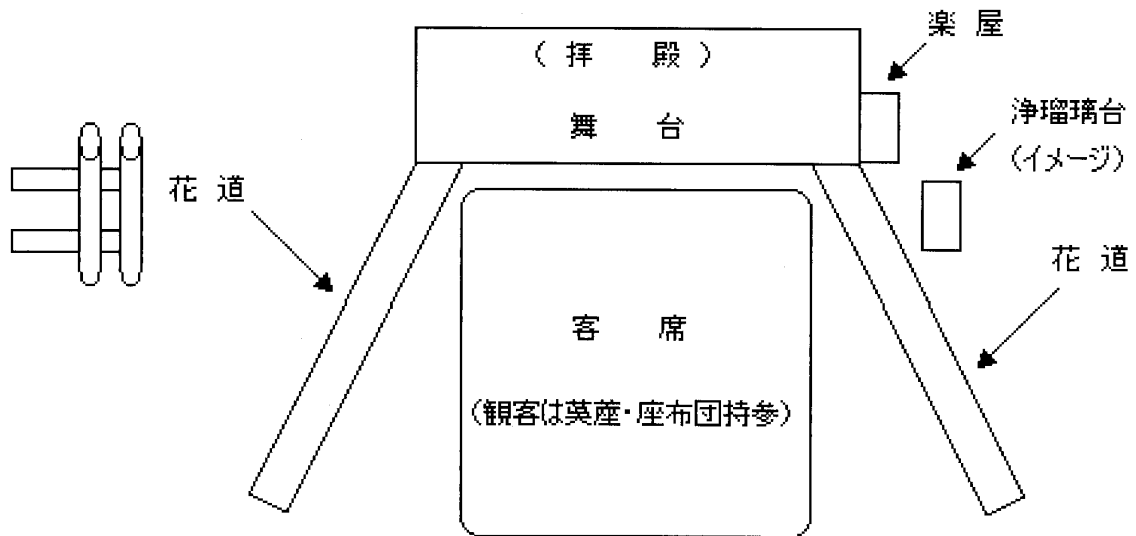
< 戦前・曾々木・村芝居（拝殿内観イメージ図） > 図1



< 戦前・東大野・村芝居（外観イメージ図） > 図2



< 戦後・曾々木・村芝居（外観イメージ図） > 図 3



## 2. かもめ座成立までの変遷

青年団による村芝居の系譜が途絶え、その後はまとまった集団による演劇活動らしきものは見られなくなる。しかし、芝居好きのこの土地の気風からか、1985（昭和60）年、3月3日、民俗資料館の中で上時国家のお雛様を飾ったお雛祭り<sup>4</sup>と連動して、岩倉校下婦人会<sup>4</sup>による公演『岸壁の母』が行われた。かもめ座座長であるK氏（前述）はこの際に現在の師匠につき、冬の間踊りを習った。

お雛祭り公演に参加した曾々木のメンバー達は婦人消防隊のメンバーでもあった。彼女達は1987（昭和62）年、11月に金沢実践倫理会館で行われた「母と子の防火全国大会」に参加するための出し物として、キリコ太鼓、笛などを一緒に練習することとなった。全員太鼓、笛の演奏は生まれて初めてで、それは必死で練習したという事である。メンバーであったM氏（前述）は、今でも当時使用していた輪島塗の横笛を大切に保管している。この大会後も10人ほどのメンバーで色々なイベントへボランティアで出演したが、芝居などを行うことはなかった。

その後、集団による公演が行われることなく過ぎていったが、この「昭和60年」の曾々木のメンバーが思わぬきっかけで再度集結することとなった。契機はナホトカ号重油流出事故であった。

1997（平成9）年1月16日、すでにナホトカ号重油流出事故のニュースが報道されていたが、曾々木では翌日（~~5月18日~~）の波の花フェスティバルのための大鍋の準備が行われていた。ところがその最中に、珠洲の長橋に重油が流れ着いたとの情報が入った。曾々木の人々にとって、近辺に重油が流れ着いたというニュースはこの長橋が初めてであったため人々の動揺は激しく、即座に波の花

フェスティバルは中止となり、長橋へ炊き出しボランティアに行くことに決まった。~~3月17日~~、炊き出しボランティアを終え夕刻に鍋釜を洗い終わり、ふと曾々木の海を見ると既に重油が海岸へ寄って来ていたということであった。この時の曾々木の人々の精神的ダメージは計り知れず、その気持ちは転じて、1~3月にボランティアに来て下さった人々への深い感謝へと繋がってゆくこととなる。

1997年3月11日に漂着重油の終息宣言が出され、3月23日に曾々木観光協会と自治会が主催して、ボランティアへの感謝の意を込めた「重油ありがとう」イベントが行われた。このイベントのために観光協会が「昭和60年の公演」の経験を持つ人々（=婦人消防隊による大会公演メンバーとほぼ同じ。且つ観光協会の会員）にイベントのための出し物を依頼し、再びお雛祭り公演の際のメンバーが集まることとなった。

イベントはふるさと体験実習館で「ふるさと祭り（海藻まつり<sup>9</sup>の代わり）」とノミの市として催された。1997年3月24日の北國新聞によると、町野のみならず珠洲市大谷や柳田村などの近隣地区からも多くの人々が参加し、うどん、そばのコーナーが設けられ、余剰品のノミの市が開かれた。『岸壁の母』の上演をはじめとして、演芸会のような和やかな雰囲気では進み、大成功の内に幕を閉じたということであった。当日は観光協会持ちで旅館のバスが動員され、鍋の材料が提供され、公演の際の花、おひねり、寄付、収益などは自主的に観光協会に寄付された。

この「重油ありがとう」イベントの盛大さと成功は、集まったメンバー達にとって印象深い良い記憶として残るものとなる。そこで2000（平成12）年5月にK氏がメンバー達に再度声をかけ、劇団結成について相談すると、「重油ありがとう」イベントで「協力」すれば「やれば出来る」という気持ちは芽生えていたメンバー達はK氏に賛同し、同年7月かもめ座が結成される運びとなった。

かもめ座による第1回の公演は2001（平成13）年3月に行われ、以降観光協会と自治会の後援を受けながら、毎年3月にふるさと体験実習館（体育館設備があり舞台がある。厨房も完備）で定期公演が行われることとなった。公演数は年々増加傾向にあり、2005（平成17）年には3月（1公演）、4月（3公演）、6月（1公演）、9月（3公演）、その他（1公演ほど）と年間計10公演ほどをこなしたことになる。

このようなかもめ座結成にいたるまでの経緯と村芝居には直接的な関係はないように思える。しかしインタビューの中で「この土地の人は誰かが何かをやっていたら手伝わずにはいられない。だまっていられない」「『演る』ことが好きな気風がこの土地にはある。それ故に『観る』ことが好きな気風も残っているのだと思う」という答えも返ってくるように、「演る」こと、「観る」ことの好きな人々が1つの目的に「協力」して「参加」という気風が、一貫してこの曾々木の地に流れていると言えるのかもしれない。



### III. 組織構成と活動形態

#### 1. 構成と運営

現在のかもめ座は全座員約45名で、役者方20～25名、後方支援（裏方スタッフ）が20～25名（全体の3分の1程は厨房や売店を担当）で構成され、役者も裏方もこなす者もいる。座長1名、副座長2名、連絡係が各地区（下地、新出地、港）から1名ずつ計3名、記録係1名、会計係1名を中心に運営されているが、細かな事などは常に相談し合い、助け合うことで全体が機能している。

座長は劇団運営を統括する役割を担い、公演の際も劇団を代表して観客への挨拶をこなす。その他にも、座長であるK氏（70歳代の女性）は自宅の旅館を練習場所として提供したり、舞台に必要な浴衣（衣裳）なども積極的に提供している。筆者が受けた印象では、K氏は非常に穏やかな方で、温かくゆったりと構えながら多くの座員をまとめられているように見えた。副座長は座長を常に補佐しながら、運営に関しても細かく心を配り、また公演でも進行役などの重要な役割を担う。筆者がインタビューしたM氏（60歳代の女性）はてきぱきと何事にもビジョンを持って答えられていたことが強く印象的であった。K氏もM氏も言葉遣いがきれいで、曾々木の言葉も標準的な言葉も使われるようで、舞台人に多い「耳の良さ」を持つ方々と思われた。このような「耳の良さ」を持つ座員はK氏、M氏に限らず他の座員にも見受けられた。

記録係は何か集まりがあるごとに、日付けや出席した人の名前、活動の内容などを詳細にノートに記録している。発足当初から同じ座員が担当し、現在のノートは5冊目で、会合の時は1冊目からのノートや資料を袋に入れて持ち歩いている。9月2日のインタビューの際は、全員の衣裳が全て返却されたかをチェックする表を持参していた。会計は基本資金を元とした収支を漏れなく記録してゆく。会計報告は集まるごとに行われ、1年の会計報告がまとめて行われることはない。会計系のN氏はエクセル、ワードを使いこなし、収支をエクセルで打ち込んで記録している。このような収支や座員が立て替えたレシート、その他の広告、案内、プログラムなどを全てファイリングしている。

基本資金は、座員の入会金1,000円、公演時のおひねりや花<sup>6)</sup>などの収入などが中心となっている。ただし、収入の一部は市や社会福祉協議会へ寄付されている。また、売店を出店する場合（定期公演の時や、主催者側からの要望があった時に設置）は、売上の1割を場所代として残りを収入として計上する。2005年9月2日のふるさと体験実習館における公演時も出店しており、おはぎやクッキー、漬物などが並び人気もあった。しかし、なにぶん暑い日であったため、入り口で主催側のJA珠洲からジュースが配られたが、「休憩時間に口に出来る、アイスかジュースが売店にあればもっと良かった」との声も挙がっていた。（2006年の定期公演の売店の様子はIVに記す）

かもめ座には広報の担当者はおらず、「越後屋<sup>7)</sup>」、新聞の折り込みチラシ「まちかど伝言板（地域

広告チラシ)」などで PR することはあるが、積極的に PR を行っているわけではない。それは座員達の中に宿泊施設関係者が多いため観光シーズンには多忙で公演を行う事が難しく、ほとんど定期公演と公演可能な時期のボランティアに限られるため「あまり忙しくなりすぎても困る」という理由からで、あくまでも口コミによる宣伝効果が現在のところ理想的と考えられているからのようである。

かもめ座が公演以外に団体として活動することはなかなか困難であるが、かつては「石川県地域づくり推進協議会」に参加したこともあった。しかし、結局趣旨の違いにより参加は休止することになった。その他に、余暇でかもめ座で旅行に行くこともあり、その時はかもめ座の予算の中からいくらかの補助が出ることになっている。

市に対しては今後、照明や冷暖房設備等を要望してゆく予定である。9月2日の公演の際の実習館への暗幕<sup>8)</sup>の設置は寄付という形になるため、農林水産課（ふるさと体験実習館を管轄）から市に書類を提出するように助言された。寄付をこのような書類の形にして残すことによって、後に必要なものを市へ要望しやすくなるということである。

## 2. 製作に関して

舞台製作<sup>9)</sup>には一般的に多くの経費と人手を必要とするが、ボランティアを基本とするかもめ座では如何に経費を抑え、限られた人数で製作を進めてゆくかが重要な課題となる。

製作の中でも音響は専門技術を必要とし、機材も高価で、且つ持つ運びするには大きく重い。故に、60歳代を中心とするかもめ座の女性達がどのように音響に取り組んでいるのかは興味深い事項であったが、音響は全面的に柳田にある「BL サウンド」に3年前から依頼しており、それまではテープやピンマイクを借りて、カセットデッキのスピーカーを使って座員自身で行っていたということであった。

BL サウンドは元々「Black Lilys」という、今年で結成25年目のバンド活動を行っているグループである。メンバーは6人で、そのうち2~3人が音響に携わっている。イベント音響やオリジナルCD製作などを専門として行うようになって15年ほどで、普段は柳田の古い小学校を借りて活動している。小さなイベントの場合は機材運搬、操作を全て1人でこなすが、大きなイベントの時は人数も多くして対応している。「苦勞するところは」とのインタビューでは「1番難しいのは芝居の音響で、ハウリングが起きないように4本のマイクの調節に神経を使う」という答えが返ってきた。柳田在住のメンバーもいれば能都町のメンバーもいて、職業も様々で、9月2日の公演を担当していた制作チーフのY氏の本業はクリーニング屋ということであった。かもめ座公演などは基本的にボランティアなので料金は発生しないが、かもめ座からの謝礼は気持ちとして受け取っている。

照明は今のところ基本的な設備をBLサウンドから借り、助言や協力を受けながら座員自身で操作

を行っている。しかし、人数が少ないので照明に人手を回してしまうと演目自体に影響が出てしまうため人手を中々回すことが出来ず、かといって照明は重要なのでおろそかにも出来ないというジレンマを抱える状況にあるといえる。

大道具は、実習館などにあるものを最大限に活用している。かもめ座の大きな特徴の1つは、簡単には準備できない書割（かきわり＝背景画の事。かもめ座ではバックポスターと呼ぶ）の見事さにある。この書割は座長K氏のご長男が1人で手がけている。遠目だけでなく近くで拝見しても入念な描き込みがされた力作で、1つの芝居に必要なだった3枚の書割に約2ヶ月を要したということである。彼は小さな頃は近所に保育所がなくて、大好きな絵ばかりをずっと描いていたということであった。模造紙はかもめ座側で大きなものを巻きで購入し、それらを何枚か貼り付けて用意する。絵の具は100円均一で全て購入している。

小道具も既にあるものを如何に利用して工夫するかをまず考える。たとえば、芝居で使用する冠に、神社の灯り取りが利用できないかと想像したりするという事である。好意から借りられるものもあり、今年の定期公演では岩倉寺から芝居に使用する錦の布を借りることが出来た。どうしても作らなければならないものも如何に経費を抑えるかを考えなければならないので、既に引退している大工さんにボランティアで作ってもらうこともあり、お礼に日本酒を持っていったりしている。

衣裳もほとんど既存のものに工夫を施したものであり、2005年定期公演用のベレー帽や今年の定期公演の市女笠、サスペンダーなどをまとめて新調したりするようなことは珍しいのだという。元となる着物や浴衣は、座長K氏から提供された従業員の昔の制服（浴衣）や、以前大阪で舞踊の師匠をしていた方が亡くなり、荷物の一部が曾々木に引き取られた際に親戚の方から貰い受けた多くの着物類など善意の方々から寄付されたものを利用している。

衣裳にも100円均一で準備した様々な飾りを布用両面テープで留めたりして工夫する。さらに、髪飾りも色々組み合わせを苦心してイメージに合うものを作っている。その他に、大・中・小にサイズを分けた正方形の布の四方を縫い、真ん中に穴を開ければ格安のガウン型衣裳となり、これはガウンの下に次に出るための衣裳も着込める利便性を兼ね備えることとなる。座員の中には、かつて縫製関係の仕事をしていた者が2人いることも衣裳制作を考える上で大きな手助けとなっている。

着付けには早変わり用のマジックテープは使用せず、普通の着付けを行う。各人が速くできるように練習はするが、言うまでもなく速度は個人の技量によって異なる。

以上のような大・小道具、衣裳などは、演目を決定したら3月の定期公演に向けて2月頃から作り出す。「皆でアイデアを出し合うとフツフツと色んなことが思い付く」ので、常に「どうしたらいい」「なんとかしたい」と皆で話し合うようにして、物事を1つ1つ解決して決めてゆく。衣裳を1度使用したら各人が家で洗濯し、全ての衣裳を持ち寄り並べる。鉢巻、草履、帯などにも全ての端にペンで番号が書いてあり、それらをチェックし種類別に衣裳ケースや箱に入れ、「若い者（モン）」

が車で保管先のN氏（会計のN氏とは異なる）の倉庫まで運ぶ。

化粧に関しては、普段の公演では専門的な製品や化粧法を用いているわけではない。かつて『梅と散りぬる』という演目の際にカツラと雰囲気を合わせるために舞台用のファンデーションを使用したのみである。まだ、舞台用の化粧法を習った事はなく、金沢の「金沢ハレルヤ」という小道具、衣裳、メイク専門店から年に2回ほどメイクの講習会のDMが来るが行ったことはない。

舞踊や民謡、芝居の練習は、K氏の自宅の旅館やふれあいプラザ（＝ふるさと実習館）の和室を中心に行われる。ふれあいプラザの部屋は予約さえすれば60歳以上の曾々木住民は無料となるのでかもめ座の練習場所として利用されている。総練習の時などは実習館の舞台（有料）を使用する。舞踊は先生について習っており、定期公演の半年ほど前になると月に2回ほど金沢から来てもらう。皆で習う踊りの費用は座で持ち、個人の踊りは自己負担となる。9月10日の柳田公演のための練習風景を見学した9月5日の記録では、朝10時40分頃から集まり「大島ドンドン節」や「おわせ節」を練習し「足が覚えとらん」と言いながら、練習後も数人で動きの確認をしていた。

台詞は練習の中で覚えてゆく。これまで5回の公演のうちで座員の台詞が飛んだことはほとんどないということであった。

脚本は、以前はI氏（現在は金沢在住）が、現在は副座長のM氏が担当している。M氏は古典などを書くこともあるが、基本的には昔の事を現代の人々に伝えたいとの思いから、M氏の祖父（当時95歳程）から聞いた話を元にしたたり、地元を主体としたテーマを取り上げようと身近な事柄からヒントを得ようとしていたりしている。最近は収集日に放置された規定時間外のゴミを眺めながら「これらを引き取る企業があって、ゴミがお金に換金されたら、人々はどのような反応を示すだろう」と想像をめぐらせているそうである。M氏は「悲しいものより、喜劇の方が頭に浮かぶ」という事で喜劇に興味があるようであった。また、かもめ座には演出の担当者はおらず、出演者で話し合いながら詳細を決定してゆくこととなっている。

演目順序などの構成の決定は、役者の衣裳替えの都合を配慮することによって順番が決まってくる。かもめ座の公演を取材して筆者が印象的であったことは、時間がきちんと守られていることである。かもめ座内では「幕間はなるべくなくすか、短くする」「各幕開始時間はきちんと守る」ことは特に意識して実行されている。このような演目順序が決まると書割を取り外して掛ける担当者（大きなホールでは1度に何枚も掛けられるが、小さなホールではそのたびごとに掛ける）も自然と決まり、時間のある者が責任を持って行うこととなっている。実習館には上げ下げ可能なバーはあるが、書割設置にはビニールひもで取り付けられた洗濯バサミを利用するので、ここでも短い時間に如何に連携プレイが行われるかが重要となってくる。

経費を節約する座員達が、今1番欲しいものは「照明」「黄色と白色の暗幕（今あるのは水色と緑だけ）」「舞台の広さ」で、今後これらを加えることによって製作がよりスムーズになるであろうと

いうことであつた。

#### IV. 定期公演

かもめ座の定期公演は毎年3月の第1日曜日を予定している。2006年は3月5日で、前日の4日には総練習が行われた。これまで筆者は9月のJA 珠洲主催のボランティア公演しか実際に拝見したことがなかった。9月の公演は、表1のように午後1時から3時15分まで10演目が上演されるものであつたが、定期公演では表2のように23演目が午前10時から午後2時20分頃まで上演された。これだけの演目を2月のみの練習でこなしてゆく。「今回は芝居が2つじゃなくて1つだから、これでも楽なほう」なのだそうで、その分練習が減るだけでなく、本番の書割の掛け替えの手間がなくなるということであつた。多忙な女性達ではあるが、本番が迫ってくると座長が提供する自宅旅館の大広間を利用して、午前9時から午後5時半頃まで都合のつく者が練習に集まり、時には夜中まで練習することもあつたそうで、前日の総練習でもまだ不安な箇所を確認し合っていた。

表1 2005年9月2日 公演 (JA 珠洲主催) プログラム

	1		開会のあいさつ
1:30pm	2	踊	「朝市音頭」
1:35pm	3	踊	「東京だよおっかさん」
1:40pm	4	踊	「柔」
1:40pm	5	踊	「新庄節」
1:50pm	6	踊	文部省唱歌
1:55pm	7	唄	コーラス
2:10pm	8	劇	「岸壁の母」
2:45pm	9	踊	「夢うぐいす」
2:55pm	10	踊	「雪しぐれ」
3:05pm	11	踊	「写楽」
	12		閉会のあいさつ

##### 1. 総練習

舞台設置は3月3日の午前9時から行われ、4日には午前9時には全員そろい10時頃からは総練習のみの状態となっていた。紅白幕の後ろには更衣室があり、そこだけでなく客席から見えない通

路も着替え場となっていた。今回、舞台前方に幅 100 センチ分程の付け足し舞台を取り付けた。これは終了後片付けられることとなる。このような設置費は花などで蓄えられた予算から捻出される。かもめ座の定期公演で振られる花は少なくなく、今年は本番当日に花を振った 130 名程の名前が書かれた紙が壁にずらりと並んでいた。花を振った人にはかもめ座で作った手拭いが配られ、後にお礼状が届けられる。この手拭いは幟旗と同じ七尾の業者が請け負っている。総練習中も、今後使用する手拭いの色について相談に来ていた。

音響・照明の設置は BL サウンドのスタッフが行っており、今回の照明は舞台下左手（客席から見て）に 1 つ、舞台手前左と右に 1 つずつ設置された。次々と座員の練習が進んでゆき、昼食を済ませた午後 1 時過ぎからもう 1 人の音響スタッフが加わり調節が続けられた。

午後からは厨房で明日の売店の準備のために大きな鍋で煮炊きが行われ始めた。演者達の確認も行われてゆき、2 時 20 分頃から新作の『きよしのズンドコ節』の練習になると会場後方にいたスタッフからも「舞台の下の方の人の顔が見難いから、照明とかどうにかならないかなあ」「舞台にもう何人か上った方がいい。上があっさりして下がゴチャつき過ぎ」と指示が飛ぶ。スタッフ 5 人が寄り合い、ダメ出しが行われ構成が完成されてゆく。

2 時 45 分頃から用意されたお菓子とコーヒーで休憩。3 時 10 分頃から「幟旗を外に立てに行こ」と何人かが出て行った。幟旗は 20 本ほど用意され、それが本番当日曾々木の道路に立ち並び、いよいよ公演が始まる雰囲気になってくる。残ったスタッフで『平成のおさばき』の書割が取り付けられる。洗濯バサミに 3 人がかりで取り付けられ、バーの高さ調節に入ると、眺めていたスタッフから「上げてー」「下げてー」と指示が出され調節される。

総練習が終わり、筆者が宿へ帰り夕食を済ませると、厨房にコーヒーを飲みに来ないかと誘われた。この宿は K 氏のご家族で経営されており、厨房には手伝いに来ていた座員を含め 5 人の女性がいた。談笑しながらお菓子などを頂いていたが、そのうち座員の方から「正直かもめ座を見てどう思った？」と率直な意見を求められた。しかし、残念ながら筆者は思いを上手く表現できず、あらためて問われた時に答えることの難しさを痛感することとなった。

座員が夜の練習のため帰られた後、後片付け中の女性（座員の娘さん）と後で入ってこられた K 氏のご主人（80 歳代の男性）の 3 人となった。2 人とも大変曾々木に愛着を持たれており、かもめ座にも深い理解があることが窺えた。しっかりとした自分の意思を持って話され、特にご主人からは「せっかく調査に来たのだから、曾々木の今後に繋がるビジョンを見せて欲しかった」とのご意見をいただき、調査結果の地域還元についても考えさせられた。その後も、様々な曾々木についての話や「もっと曾々木に来て欲しい。そうするにはどうすればいいのか」などの思いを深夜に渡るまでお聞きすることができた。

## 2. 公演当日

3月5日の本番は午前8時頃から座員が集まり始め、9時にはほとんどの座員が集合した。観客も8時半頃から入り始め、9時半頃には販売されていたおにぎり(一個100円)が特によく売れていた。その他売店には、カップ酒、缶ビール、缶コーヒー、お茶、輪島せんべい、バームクーヘン、菓子類、つまみ類がおかれていた。厨房前には作られているうどんの食券を買うためか、小学生の女の子のグループが並んでいた。5~6人の小学生のグループは2つ程見受けられた。また、全体には中高年層が多く、座布団を持参する観客も少なくなかった。

以下、本番当日の公演の様子を表2にまとめた。

表2 2006年3月5日 第6回定期公演(演芸会)

10:00am	1		開会のあいさつ(座長からのあいさつ。)
10:05am	2	踊(全員)	「朝市音頭」(全員同じ衣裳で登場。) —観客の知っている曲らしく、会場から手拍手。
10:10am	3	踊(1人)	「播磨の渡り鳥」(浅黄色の着物に三味線を持って登場。)
10:15am	4	踊(6人)	「能登の船漕ぎ唄」(黒の上下に赤い法被で登場。) —場内灯が消される。
10:25am	5	大正琴 (1人)	「うれしい雛祭り」「北国の春」 —2人のはずが1人欠席。サビになると観客が聞き入っている様子。
10:35am	6	寸劇(4人) 書割(怪しげな月夜の森が描かれている)	「まんが日本昔ばなし」(「こぶとりじいさん」角にトラ皮模様のパンツの青鬼と赤鬼が登場。続いてチャンチャンコに継接ぎの股引、セナガチを担いだおじいさんや意地悪じいさん登場。) —台詞のある音楽寸劇。お尻を振る鬼のしぐさや、こぶが2つになる場面に会場大受け。
10:52am	7	踊(1人)	「おにぎりの歌」(緋の黒っぽい着物に黄土の前掛け姿。)
10:55am	8	踊(5人)	「スーダラ節」(黒いシャツにピンクのズボンとネクタイ姿。) —5人の服装と軽快な音楽に会場から笑いが起こる。1人が袖に引っ込み、でかいブラジャーなどを着けて登場すると、会場には手を叩いて大喜びする人も。
10:58am	9	詩吟(1人) 尺八(1人)	「川中島」(朱系の着物に黒い帯の女性と袴の男性が登場。) —後方まで良く声を通る女性の声に会場も聞き入っている様子。
11:05am	10	劇(9人) 書割(上部半分に大きな仏様と極楽の模様、下部半分に地獄絵図が描かれている)	「平成のおさばき」(アナウンス「平成のおさばきでございます。皆様におかれましては、合掌。チーン!」で場内爆笑。)(写真1) —三途の川の係の幽霊が、渡ってくる4人(息子夫婦にいじめられたおばあさん、ヤクザ風の男、バイクでスピードを出した若者、親に虐待を受けた女の子)の人間を閻魔のおさばきの場に連れてくる。ドラの音と共に、閻魔がいかつい髭と帽子、黒い衣裳をつけて登場すると、場内の小さな子供が泣き出し場外へ連れて行かれてしまう。その様子がかわいらして、観客から笑いが起こる。 1人1人が裁かれる度に閻魔が使う方言に、場内は笑いに包まれる。特に小さな女の子が可愛がってくれたおばあさんを探して泣くシーンでは、幽霊達が「泣かんとこ、泣かんとこ」「ばあちゃん、どっか

			あこらにおるさかい（どこかあのへんにいるから）」と会場の方を指差すと、高齢者の多い場内は大爆笑。 女の子がかわいそうで泣く閻魔。アナウンスで「…閻魔泣かせの世相です…それぞれの人生、努力してまいりとうございます」。
11:35am	11	踊 (1人)	フラダンス (座長が負傷して、急遽変更)
11:46am	12	コーラス (20人)	コーラス (ピンクのマントに、赤いベレー帽、楽譜を持って登場。) 昭和歌謡のような2曲。かもめ座の選曲は歌詞が面白いものが多い。
11:50am		昼食	うどん (200円) に多くの人が集まる。クシメ <sup>10</sup> やおはぎも置かれたようだが、人が多すぎて売店の様子が確認できないほど。うどんが買えなくて、外の食堂に食べに行った人もいた。
1:00pm	13	? (10人)	ドスコイ (大銀杏のカツラ、風呂敷を工夫した化粧まわし、男性のらくだ色の下着を肉布団のようにつけた力士スタイル。) ー演者が花道を通ろうとすると、観客が握手を求めてきたり、掴んで離さなかったりして、なかなか前へ進めない。舞台へ上ると1人1人が前へ出て、まわしを上げて見せるたびに場内が拍手で湧く。
1:12pm	14	踊 (5人)	「日光和楽」(水色の衣裳に花笠。)
1:18pm	15	奏 (2人)	三味線 (民謡担当の女性と三味線担当の男性のご夫婦。)
1:25pm	16	踊 (5人)	「相川音頭」(黒い衣裳の袖の袂に銀のテープを格子に張って華やかにした着物を着用。)
1:30pm	17	踊 (1人)	「大利根無情」(白地に書き文字の着物、黒地に金の帯、徳利と手拭いを小道具に登場。) ーおひねりが多く飛び、幕が引いた後、付け足し舞台におひねりが残されたため、演者が幕から再度現れてお礼を言いながら拾う姿がご愛嬌で、場内が笑いに包まれる。
1:35pm	18	奏 (1人)	尺八吹奏 (虚無僧姿の男性。) ー「リンゴ追分」「北国の春」などが演奏される。「北国・・・」演奏中、耳を澄ますと会場が控えめに合唱しているのが分かった。しかし、その後の「アメージンググレイス」の際、「北国・・・」の時よりも後方から合唱(ハミング?)が聞こえ、演奏後も筆者の前方の女性(60歳くらい)3人が「これ、いい曲やわ～」と話し合っていた。
1:47pm	19	踊 (18人)	「しゃ楽」(市女笠に薄い布を付けた平安貴族風女性達。) ー花道を通って舞台には上らず、下手 <sup>11</sup> の紅白幕の方へ入って行く。「どうにもとまらない」(花輪を首にかけ、髪に赤い花を付けている白いブラウスと青のスカートにキラキラした飾りを付けて工夫) ーレビューのような出し物。終わると男性からも「ヨーッ！」などと掛け声がかかり、男性達の「イヤァッ!ハッハッハッ!」という笑い声。山本リンダということで、男性にも受けたのか。
1:55pm	20	踊 (1人)	「人生一路」(粗い縞の着物に、オレンジ系の帯着用。扇子使用。) ーおひねりが多く飛び、「大利根・・・」同様幕引き後に演者が拾いに来て、三つ指を付いてお礼を言って下がっていった姿に拍手起こる。
2:02pm	21	打 (5人)	八世太鼓 (曾々木青年団。) ーアナウンスでキザン和尚と八世太鼓についての説明が流れる。面や付け髪をつけた叩き手や、和尚装束の叩き手が馴れに叩いてゆく。
2:12pm	22	踊 (15人)	「きよしのズンドコ節」(手作りの銀の山高帽、白シャツ、ズボン、サスペンダー着用。)(写真2)



			一幕が開くと、もう9人が舞台上に立っている。次に下手から6人入ってくる。「オーッ！」と会場からざわめき。選曲も観客に受けた様子。終わると大拍手。「イヨーッ!」「ヨッ!」と男性の掛け声や、女性達の「アンコール!」の音が飛ぶ。
2:17pm	23		閉会のあいさつ (座長のあいさつ) 一感謝の気持ちを表し、来年の定期公演の紹介をし、全員礼して終了。

座員達は踊りに関しては先生についているだけに、笑いを取るような他の演目に比して、引き締まった表情を見せていたように思う。筆者は踊りに関しては無知であったが、見せることを心得ている人々の踊りには引き込まれて見る事ができた。舞踊を含め演技中も、歌舞伎の大向う<sup>12)</sup>のような掛け声が「〇〇ちゃん!」と掛かる。地域の知り合いが多く、久々に合った人々が声を掛け合っている様子や、友人が友人を応援する姿も多く見られた。他地域からわざわざ来場する人もおり、「内灘から来た」という4人組(60代程)や、また体験教室を期待して観光に来て、たまたまかもめ座の公演に出くわしたという関西からの4人組(60代程)もいた。

写真1 『平成のおさばき』

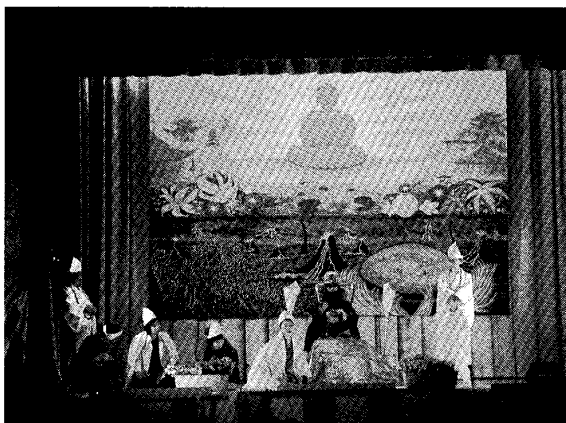


写真2 『きよしのズンドコ節』



### 3. 反省会

公演終了後、後片付けと清掃が行われ、3時半には実習館内の和室で反省会が行われた。座員は舞台・裏方要員24名、厨房・売店要員12名で、来場者は250人を越えているということであった。最初に作った200枚のプログラムがなくなり、急遽50枚作り足したがそれもすぐなくなったそうで、プログラムを持っていなかった人々も見受けられたことから、おそらく300人以上と考えられる。座員達は「なにより天気が良いのが良かった」と非常に天気を気にしていたようで、「お年寄りが、ちょっと出かけてみようかなという気になるでしょ」ということであった。その他、たまたま来況してかもめ座の評判を聞きつけた、山口県・萩の劇団の団員も観に来ていた。

お菓子やコーヒーを食しながら、3時40分から座長K氏の挨拶が行われた。「皆さんががんばって

らっしゃる姿を見て涙が・・・」と涙ぐむK氏に対して、座員たちが「あら～、もらい泣きしてしまいがいね～」と笑い合っていた。

細かなお金の出し入れや、差し入れ、差し入れに対するお礼をどうするかなどを確認し合い、明日（3月6日）の最終的な掃除や片付け、道具の修理の開始時間を「午前9時からやし～」と決めて反省会は終わった。その後配られたスタミナドリンクに多くの座員が「飲もっ！」と言って手を伸ばしていた。公演が終わっても家で家事が待っている女性達が、また気合を入れているようで、なんともたくましい様子であった。

## V. かもめ座に関わる意識

### 1. 座員の意識

ここまで概観してきたように、かもめ座は「女性のみであること（性別）」「曾々木在住であること（居住地）」「ホテル、旅館、民宿関係者が比較的多いこと（職種）」などの面で地域劇団としての特色を持つ。では、彼女達がこのような特色をどのように捉えているのか。地域劇団における座員にとって意識的に維持されているものなのか、無意識のものなのかを把握するにあたり、今回は簡単なアンケート調査<sup>13)</sup>を行った。

「かもめ座の皆様へ」（表3）の①～③は、彼らが奥能登の地でプロの公演に触れたことによって芝居に興味を持ったのか、またどのような公演を観劇することによって刺激されたのかを多少なりとも窺うことが出来ればと思つての質問であった。インタビューではコンサートやDVD鑑賞に興味を持つ人々は決して少なくなかったが、ここでは観劇経験の実体については掘むことが出来なかった。ただ、この結果のように観劇経験のある者が比較的少ないのであるとすれば、彼らがプロに刺激されてというより、歌舞伎や芝居に興味のあるごく一部の牽引力のある人々に引っ張られながらそれぞれの興味を高め、地域性を背景としたまとまりを持って活動をしている劇団であるということがいえよう。

いうまでもなく、表3の結果は、一部の座員の声にすぎず、かもめ座全体の意見を網羅するとは言えないが、1つの傾向としてかもめ座が「女性」「曾々木」でまとまることに意識してこだわっている様子を窺うことが出来る。聞き取りの中でも男性を入れない理由に関して「女性だけの方がまとまりやすい」「女性が男性を演じるという面白さがある」「狭い地域なので、たとえ舞台の上でも他人同士が恋人役とかをすると夫婦不和にもなりかねず、長続きしなくなる」と同様の声が挙がっていた。

また、曾々木でまとまる理由には、宿泊施設を営む者が多いことが背景となっており、忙しい金、土曜日と後片付けのある日曜（特に5～11月）は活動に協力できないことも多く、他地域の人と共

同活動をしようとする「協力的ではない」とされてトラブルになる可能性が否めないということであった。その他、聞き取りの中で「地域の人が年に1度でも集まって団結して何かをやることは必要であり、意義のあることだと思っている」「意思の疎通がはかられなくなる時代に、1つの地域でまとまる（団結する）ことに意義がある」「若い者から老人まで、日常を離れて1つの場所に集まり同じ時間を過ごすという動きが良い」などの理由も挙げた。

聞き取りでは、活動を継続するためには、「無理しない参加の仕方が大切」「できることで参加すればいい」、さらに継続することによって「家庭の中にいる時と比べて、ものを考える範囲が広がってくる。自分のことだけ考えてはいられない」などの回答もあった。

このような結果が、かもめ座座員の全ての意識とはいえず、今回挙げられなかった「声」「言葉」を捉え切れていないことは課題として残されるが、一方で上記のような意識が昭和60年の雛祭り公演を1つの機とする女性劇団を牽引してきたともいえるのではなかろうか。

あらためて、昭和60年の雛祭り公演から関わってきた座員の声として、かもめ座に参加する意義をK氏とM氏に尋ねてみた。2人は「年を取ると、皆老人ホームに入ることばかり考えるようになりがちである。しかし、自分は生涯『自立』していきたい。……人には『何か』ある。人は『何か』を持っている。そんな人が集まることによって『可能性』が生まれる」と述べられた。これからの『自立』が大切なのであり、自身が『自立』の心を持って、皆で協力することによって「活気」「発見」「問題解決」などの予想しなかった可能性が生み出される。それがかもめ座に参加する意義であり、またそこにかもめ座の特筆すべき点があるということであった。

## 2. かもめ座を取り巻く意識

以上のようなかもめ座座員達が、多忙な日常生活を一時的にでも離れ、活動に参加するには家族の理解が欠かせない。たとえ、積極的なサポートはなくとも、「やるべきことさえしていれば」活動を許してもらえるといる者も少なくなかった。また、中には表3「かもめ座のご家族の皆様へ」②③に見られるような非常に積極的で温かいサポートに支えられた座員もおり、妻（或いは母）に参加することに対しての強い拒否反応はこれまでのところは見られていない。

最後に、これまでは「演じる側」の意識を述べてきたが、舞台を作り出すにあたって生じる意識として、もう1つ「観る側」の意識が挙げられる。しかし、定期公演以外はボランティアを主とするかもめ座の性質上、観客は自ら料金を支払って観劇するのではなく、（定期公演以外は）主催者側に招かれることになる場合が多い。そこであえて公演を依頼する主催者の側の意識に注目することとした。残念ながら調査期間中は2005年9月2日のJA珠洲主催の「いきがい教室（65歳以上の男女を対象とした活動。年3回募集され、旧所、名跡を回ったり、寺の法話を聞いたりする）」の公演においてでしかインタビューすることが出来なかったが、企画担当のT氏から興味深い返答を得る

ことが出来た。「何故かもめ座を選んだのか」という質問に対し、『いきがい教室』は高齢者、特に女性を中心としているのでかもめ座さんからパワーをもらえればと思い選んだ。・・・かもめ座さんには素人の集団にしかない『何か』があるはず。いきがい教室の皆さんなら、そういう事を汲み取れる年代だと思う。でも、そんな風に思うのは事務局側の勝手な思い込みかな(笑)」と自嘲しながらも明確なビジョンをもった回答をいただいた。

T氏がいう「何か」とは、言葉としての表現は得られなかったが、まさにM氏の言わんとする「可能性」のことではないだろうか。観客に行ったいくつかの同様のインタビューでは「元気をもらった」という声がほとんどであった。こちらのインタビューが彼らの言葉を引き出すことが出来るものであったなら、T氏の思いが伝わっているのかどうかなどをより知ることができたことと思うが、筆者の未熟さゆえに今回はそこまで到らなかったことが残念である。

表3 かもめ座座員へのアンケートの結果

かもめ座の皆様へ	
①過去に観た舞台(かもめ座以外)で心に残るものを3本挙げて下さい。	命棒に振る 他(能登演劇堂で無名塾の舞台だけ)。/大地の子、弁慶と勧進帳、歌舞伎。/大地の子。/都踊り、京踊り、歌舞伎(中村扇雀)、狂言(野村万斎)。 [4]
②現在観たい舞台を3本挙げて下さい。	歌舞伎(勧進帳など何でも)。/ビデオに録ったもの。(中村勘太郎ニューヨーク公演、市川海老蔵襲名公演、12月顔見せ公演)/田舎にるので観劇できない。 [3]
③自分で演ってみたい演目がありますか?	大金持ちの奥様の立場を演じてみたい。/日も浅いのでこれといった演目が思い浮かばない。 [2]
④もし何らかの理由で舞台にも練習にも出られなくなりました。どのように感じるとお思いますか?	淋しく感じると思う。/気になるが割り切る。/仕方がないと思う反面、淋しさを感じる。/風邪を引いた時、本当にすまないと思う。/口惜しく思う。/今は想像できない。/すごく残念に思うが、協力できることだけでもやる。/引きこもり、活気がなくなる。/責任を感じる。/少しでも手伝うものがないか考える。練習日に参加できないのが淋しい。 [10]
⑤若い方に今後も入って欲しいとお思いますか? ⇒「YES」の方は、もし適任者がいて、その方が近隣(曾々木以外)の方だったら、どのように対応されますか?	YES—10 NO—1 ⇒今は考えていない。/座長・副座長に任せる。/お勤めがあったりすると、なかなか難しい。/座員全員で相談する。/踊りの練習に誘う。/歓迎する。/曾々木のメンバーだけなので、丁寧にお断りする。 [11]
⑥もし将来的に、近隣にできた劇団が合流したいと言ってきたらどうしますか? ⇒「NO」の方の理由。 (「OK」の方の理由は無し。)	OK—2 NO—7 ⇒今のところありえない。/幅を広げるとまとまりがない。/気が合うだろうか。/かもめ座の特色を失いたくない。/地域密着性とかかもめ座の良さがなくなる。/特有の理由を持っているから。/曾々木の特徴がなくなる。 [9]
⑦曾々木の男性陣が入れて欲しいと言ってきたらどうしますか? ⇒それぞれの理由。	OK—3 NO—7 「OK」男役に不自由しているから。「NO」男性が入ることによって生じるトラブル(異性)を案じる。芝居はなおさら。/女性ばかりの座員なので、今のところ考えられない。/曾々木のかもめ座はあくまでも女性構成チームだから。/気を使うので断る。/女性ならではのところが「良さ」と思いがなばってきたから。/歓迎しない。 [10]

⑧かもめ座に参加することについてご家族のサポートは如何ですか。	小道具作りなど、協力してくれている。／お蔭様で協力的でありがたいと思う。／協力してくれる。／サポートしてくれている。／特別協力的ではないが、仕方ないという感じ。／舞台鑑賞に出かけたり、小道具を購入。その他の家事。／大変喜んでた。／以前は非協力的であった。／自由。 [10]
かもめ座座員のご家族の皆様へ	
①自分も舞台に立たれてみたいと思いますか？	YES——3                      NO——9 [12]
②奥様（或いはお母様、お嬢様）がかもめ座の練習でお宅を空けられる時、約束した条件等がありますか？	本年のみの実演でなく毎年恒例の実演なら、継続してするなら賛成すると伝えた。／車で送り迎えしてもらえる。／遅くならないこと。／練習や出演のための衣裳の借り合わせ、縫い合わせ、夜間の送り迎え、道具の作り方と準備 等。（これはご主人の方が協力して下さるといことか？） [5]
③奥様（或いはお母様、お嬢様）の舞台をご覧になって、どう思われますか？	アイデアに感心している。／舞台に立って色々の演技をすることは、人間の本能的発表意欲を満足させるばかりでなく、精神的にもある種の刺激を与え、脳の活性化を促進させるので大変良いと思う。また人間同士の相互理解や団結心、協力心も生まれ、生活を豊かにし芸術心も養成されるので多いに後援したい。／良いことだと思う。／一生懸命やっていると思う。／良くやってくれると思う。／レビューのようなダンス場面でお笑いを追求している時、ちょっと恥ずかしい。男踊りが多いから、女踊りも勉強して欲しい。良い趣味と仲間囲まれて幸があると思う。目指せ“泉ピン子”だあ（Vサインマーク）。／それぞれが素晴らしい奥の手を出し、本気で取り組んでいる姿は、これが家の母ちゃん！かいな。個性豊かな持ち味を出し、本気でやってくれましたので頭が下がる思い。誰一人反対もしないし、協力的だったと思う。毎年11月から12月、1、2、3月と冬期間、踊りや芝居の練習に集まり、婦人活動の慣例となってしまった。これが村おこしとなり、地域づくりとなって、毎年3月第一日曜日に村集会場（ふるさと実習館（市））で公演している。／ちょっと、恥ずかしい。／観たことはない。 [9]

## VI. まとめ

以上、女性劇団としてのかもめ座について述べてきた。現地調査を始めた当初は「村芝居」「女性消防団」「かもめ座」の存在が単に確認されただけで、これらがバラバラな要素としてしか見えてこなかった。しかし、その後の聞き取りによってこれらの背景を知ることができ、戦前から現在まで、間接的にせよ3つの要素が緩やかに繋がり続けて来た経緯を確認することができた。そのような曾々木における舞台作りの歴史を背景としながら、現在のかもめ座は地域性を強く有し、多忙な女性達が自主的に時間を作り、知恵を出し合い、コミュニケーションを重視しながら協力しあう中で、1つの舞台を手作りで仕上げる素人の劇団であるといえる。

彼らを通して興味深かったことは、「70歳代の座員が60歳代の観客に対して元気を与えている」というような世代の逆転現象である。少なくともこの場合は「高齢者」を65歳以上の枠で一律に括り

挙げてしまうことは適当とはいえ、「高齢者」が持ちうる前向きな「自立」力についても、もっと注目し、検討されるべきなのではないかと考えさせられた。

かもめ座は1つの地域の中において、あえて日常とは異なる時間と空間を参加者に提供する機能を果たしている。非日常の中で1つの舞台を作り上げる、という目的を共にするコミュニケーションの中で生まれる「可能性」は、さらに生きる「活力」にも繋がり、生きる「活力」は前向きな「自立」力を生み出すといえるのかもしれない。

自明である事柄を自分の中で明確にし、他へ対して表現することは非常に難しいことである。それにもかかわらず今回の調査の中では、筆者の質問に対して自分の思いを「言葉」で返していただけたことが多く、思いがけず「自立」や「可能性」についても考えさせられる聞き取りを行うことができた。これらは高齢者のみならず、現代に生きる我々にとっても再考すべき課題であり、また、このような「言葉」が60歳代を中心とするかもめ座へのインタビューから得られた事自体、筆者にとって貴重な調査となったといえる。

## 注

- 1) 袖丈が短く、袂に丸みがある着物。主に女性のふだん着や少女の着物の袖に用いる。
- 2) 歌舞伎の演目名には「本外題」や「通称」があるが、文中では聞き取りの中で使用された演目名をそのまま表記している。
- 3) 神社や御輿をきれいにすることで、清掃のみでなく改修や御輿の金箔の張替えの際など広義の意味でも使用するようである。
- 4) 町野地区の婦人会は、広江、栗蔵、鈴屋などの婦人会の上部組織でA・Bに分かれている。岩倉はその中のひとつで曾々木は岩倉に属す。
- 5) 現在も毎年3月に行われていて、海藻料理などが振舞われる。
- 6) 舞台公演の際に芸人などに出される祝儀のこと。おひねりは舞台に投げ込まれるが、花は受付などを通して渡される。
- 7) 輪島崎の広告情報紙。大きさを小さくすれば2回出せ、また同じものを2回目に出す時は広告料が安くなるので、かもめ座では利用している。
- 8) 実習館の窓に掛けるもので、会計のN氏が全て縫製した。それまでは後援の度に大工さんが来て、屋根葺きの下に敷く黒いシートを貼っていた。
- 9) 専門用語としては一般的に、興行の企画立案、進行、宣伝・動員までを含めたものを意味し、公演の芸術的・経済的責任を負う分野の仕事を指す。ここではかもめ座が素人劇団という事で分野に分けることができないので、便宜上実際の公演を「作る」ために必要な要素を取り上げた。
- 10) 海藻（ハバ、ウミナ、アオサなど）に味噌で味付けしたもの。串に巻いてあることが多い。
- 11) 客席から見て舞台右手を「上手」、左手を「下手」という。
- 12) 3階席や立ち見席から、役者に掛け声を掛ける（屋号を叫ぶ）常連のこと。
- 13) これは数量を見ようとするものではなく、多少なりとも彼らの「言葉（声）」を聞くことを目的としたものである。2005年11月22日に45部送付し、座長K氏のご協力によって配布され、回収29部、そのうち回答のあったもの18部であった。質問の内容が座員にとって興味のないこと、自明で言葉として表現しづらいものなどもあったことと思うが、中には熱心に応えていただいたものもあり、座員の意識を知る上での1つの目安として表3に結果内容をまとめた。回答18のうち、「かもめ座に入って何年目か」という質問に対し、「5年以上（設立以来）[14]」「4年目[1]」「1年目[1]」「無回答[2]」という結果となり、経験年数で分類すると人物を特定することになるので、年数による分類は行わない。回答いただいた方々の年齢は、50歳代[2]、60歳代[7]、70歳代[6]、無回答[3]で比較的70歳代の方が多く、また、職種の欄も、無回答[6]、主婦・

無職〔8〕、自営・自由業〔2〕、農・漁業〔2〕ということで、かもめ座の特質に伴う指標となるとは言えないが、一部座員や支えるご家族の声を聞くことが出来た点などから貴重な資料と考える。